

国語

➡ 低学年 | 「読むことの学習」

「読む力」を育む読書指導

～学力を向上させるためのヒントとして～

1. 「本を読む子は、成績がよい」？

本を読む習慣を早くから身につけた子どもは学習成績がよいと一般的に考えられています。しかし、本好きな子どもが必ずしも勉強が得意なわけではないようです。それはなぜなのでしょう。

小学校低学年では「楽しく読めること」が、読書指導の中心となりますが、書かれていることを表面的にしかとらえられないのもまた事実です。

例えば、「〇〇は、とうとう泣き出してしまいました。」という記述から、「〇〇は、泣き出した。」という事実は読み取っていても、なぜ泣き出したのかを考えたり、「とうとう」という言葉に立ち止まって、そこに込められている意味を感じ取ったりできる子どもは、年々少なくなっているようです。これが、読書が好きな子どもが、勉強が得意—理解力があるとは限らないゆえんではないでしょうか。

2. 「読む意欲」「読む力」を高めるための読書指導

そこで、子どもたちに単に読書をすすめるのではなく、読書をすることでもたらされる楽しさの質に幅をもたせ、共有すること、また、それによって本当の意味での読む力をつけさせることが必要になります。

これは、生涯にわたって豊かな読書をするための基本的な力となります。ここでは、1学期末の授業展開を工夫し、夏休みの読書を2学期からの学習につなぐための手立てを紹介します。

①「ブックリスト(カード)」作り

読んだという行為を目に見える形に残していくことは、子どもに様々な“楽しさ(効果)”をもたらします。

少し大きめの単語帳(カード)を用意して、読み終わった本のタイトルと日付を書き込むだけで、最初は十分です。カードが増えていく喜びから、読書へのモチベーションが高まります。また、そればかりでなく、カードを使って、同じ本を読んだことのある仲間を見つけて語り合ったり、カードを見返すことで、自分のアイデンティティを見いだしたりするための読書記録としても役立ちます。

自分が気に入ったセリフを書きとめたり、主人公のイラストを書き添えたりしてもよいでしょう。

②夏休みの「体験ツアー」や「実習体験」

作品に出てくる料理を実際に作ったり、工作や実験、遊びを行ったりするなど、作品に描かれている内容を追体験、疑似体験することも効果があります。夏休みなどの休暇中に、ご家庭にすすめてみてはどうでしょうか。

子どもたちは、作品の世界を自分で再構成することで、より広く深く作品を理解するようになります。

③作品にもとづいたクイズ大会

昔話や童話など、広く世に知られているお話の場合であれば、その内容にまつわるクイズをすることもおすすめです。宿題として、クイズの内容をカードにまとめさせて、1人ずつ発表してもらってもよいでしょう。その際は、最後に必ず「読んだことのない人は、ぜひ読んでみてください」「詳しくは、この本を読んでください」と本を紹介してもらいます。こうすることで、読書の世界が、個から全体へと広がっていきます。

